

(実践報告)

老年看護学概論におけるポジティブな高齢者観を育む教育方法の検討

岡村絹代¹⁾ 名和祥子²⁾

I. はじめに

超高齢社会となった今、長くなった老年期をどのように過ごし、健康にその人らしく生活を営むことは、高齢者自身や高齢者看護を实践する看護職者が取り組むべき課題でもある。

筆者らは、人生100年時代を迎えた現代において、豊かな老年期を送るために、誰もがポジティブに「幸せな老後」を自分でデザインする力が必要であるという思いから、本学の老年看護学では、「看護専門職者としての多様なポジティブな高齢者観の育成」という基礎的能力の修得を目指し、老年看護学の教育内容を組み立てている(図1)。

先行研究においても学生の持つ高齢者イメージは授業の影響を受けていることが指摘されている(石津ら, 2021)ことから、老年看護学を教授する教員の高齢者観が学生の高齢者イメージやその後の看護実践に影響することは明白である。しかし、教員自身も老年期を経験しておらず教育目標としているポジティブな高齢者のイメージを適切に伝えることには限界がある。

そこで、2021年度前学期開講の「老年看護学概論」では、地域で暮らす健康な高齢者の語りを聴く機会を取り入れ、地域社会の中で豊かにその人らしく生活している高齢者の生活を知る機会を計画した。本授業での学生の到達目標は、ゲスト・スピーカーの語りを聴き、超高齢社会を生きる高齢者の現状を理解すること、心身の加齢変化が進行する中でも、もてる力(環境に適應する力、自律・自立する力、自己実現する力等)を發揮しながら、社会の中で主体的な暮らしを継続している現状を目の当たりにすることで、ポジティブな高齢者観を養うこととした。

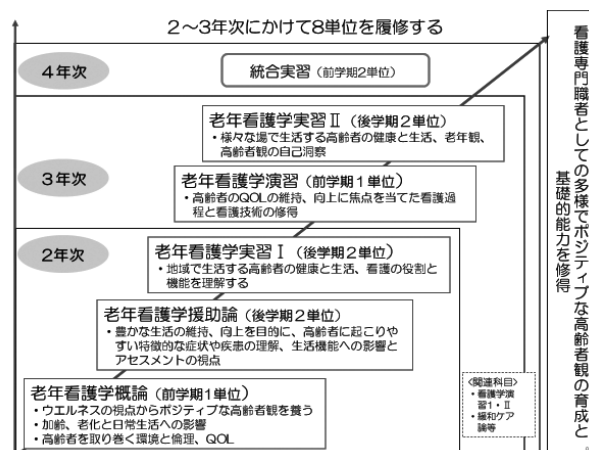


図1 老年看護学教育の枠組みと目標

II. 老年看護学概論の中での取り組み

1. 老年看護学概論授業概要

老年看護学概論では、ウエルネスの視点からポジティブな高齢者観を養うことを目標に、老いるということや老年期の特性を広く統合的に捉え、高齢者の多様性やその生活を理解する力を養うとともに、自己の高齢者観を高めることおよび、高齢者に関する保健・医療・福祉政策の動向や制度や倫理的課題を理解し、看護学における老年看護の位置づけと役割を理解することとしている。授業概要は表1に示す。

2. 「地域で暮らす健康な高齢者の語り」の位置づけ

授業案の作成段階では、第1回目の授業日にゲスト・スピーカーとして招く予定であったが、日程調整が難航したこと、また、新型コロナウイルスの感染予防対策を講じる必要が強化されたため、最終的には最終回の第8回目に、Web会議ツール「Zoom」(以下、「Zoom」)を使用したオンラインでの授業となった。ゲスト・スピーカーの選定は、瑞穂市社会福祉協議会(以下、社協)の協力を得て、社協担当者や当事者、本学の遠隔

1) 朝日大学保健医療学部看護学科

授業オーガナイザーと複数回の打合せを経て実施した。

表1 2021年度老年看護学概論授業概要

回	項目	内容
第1回	・ガイダンス ・老年看護学とは	・4年間の老年看護学教育の内容、老年看護学とは ・老いるということ、現時点での高齢者に対するイメージ
第2回	高齢者を取り巻く環境	・超高齢社会を迎えた我が国の現状 ・高齢社会とは、高齢化の要因、高齢者の生活の現状 家族形態の変化、社会参加 ・諸外国の高齢化の現状
第3回	老年看護の基本と役割	・老年期の発達課題 ・高齢者を理解するため理論と概念
第4回	高齢者と家族の暮らしを支える制度、施策	・保健・医療・福祉・介護に関する制度と施策の変遷 ・住み慣れた地域でその人らしい生活を目指した地域包括ケアシステムと介護保険制度
第5回	加齢・老化に伴う変化と日常生活	・加齢と老化（身体生理機能の変化、心理・社会的変化） 身体生理的变化、心理・社会的変化と日常生活 ・高齢者の健康状態の把握と看護上の課題
第6回	高齢者の日常生活とQOL	・食生活、清潔、排泄、セクシャリティ、生活リズム、環境、災害 ・エイジズム、高齢者虐待、身体拘束、自己決定の尊重
第7回	高齢者にとってのQOL	・高齢者にとってのエンドオブライフ ・高齢者の死と終末期 ・ヘルスプロモーションとエンパワメント
第8回	豊かな老年期に向けて	・地域で暮らす高齢者の生活の理解 ゲストスピーカーの語りから、高齢者の生活を理解し、もてる力を活用した豊かで“いきいき”とした生活に向けた看護を考える

3. ゲスト・スピーカーの背景

ゲスト・スピーカーは、瑞穂市在住のAさん72歳女性である。Aさんは、現在夫と二人暮らしであるが、子育てが終わり自分の時間ができたことで、自分自身の生活に目を向けるようになった。当初は、何に手を付けてよいかわからない状況で、バレーボールやメイクセラピー、ハンドマッサージなど身近にあるアクティビティに取り組み、その結果身につけた技術を生かして、老人ホームなどの慰問を行っていた。そして、地元テレビ局のローカル番組の高齢者レポーターとして活動するまでになっていた。現在も、メイクセラピーの講座を複数開講するなど、積極的に地域社会の一員として活動している方である。

4. 授業内容と結果

授業の企画・運営、司会は老年看護学教員が担当した。会場設定は、遠隔授業オーガナイザーの協力を得た。具体的な授業展開は表2に示す。

Aさんは、これまでの活動経験により「語る」ことには慣れており、授業の導入はスムーズで、授業展開もAさんのペースで進んでいった。「Zoom」を活用したオンライン授業の形態であったため、Aさんからは学生の表情や反応が確認できにくく、Aさんからの問いか

表2 当該授業展開

授業展開	担当者	内容
導入	老年看護学教員	・授業の概要、本時の目標の説明
	社協担当者	・Aさんの紹介
本題	Aさん	・自己紹介 ↓ ・これまでの生活、活動内容の紹介 ↓ ・メイクセラピー、ハンドマッサージ実演(学生も)
発展	Aさん ⇄ 学生	・質疑応答、意見交換
まとめ	Aさん	・看護職者を目指す学生へのエール
		・締めくくりの歌の披露(星影のワルツ)
挨拶	学生	・講義に対する感想、Aさんへの感謝
締め	老年看護学教員	・授業のまとめ、Aさんへのお礼



写真1 特技のハンドマッサージを披露するAさん



写真2 メイクセラピーを楽しむ学生とAさん

けや学生の状況については、適宜教員が仲介し、Aさんの語りが途切れぬように努めた。Aさんは、ご自身の活動状況について豊かな感情を交え、時にユーモラスに、時に学生に問いかけ、様々な生活の場で生じる高齢者の気持ちを考えるきっかけを提供された。また、特技のメイクセラピーの一部やハンドマッサージなどの実演も交え、Aさんやクラスメイトともにふれあいを楽しむ学生の様子も見られた(写真1, 写真2)。学生からは、「このようにAさんが積極的に活動している理由」について質問があり、Aさんはただ一言「楽しいから」と笑顔で答えられ、その答えに学生は大きく頷いていた。Aさんの語りを通して想像外の高齢者の活動的な生活を目の当たりにし、学生自身の高齢者のイメージとAさんの生活状況との乖離に驚く様子があった。Aさんの語りを聴いた学生のリアクションペーパーの内容には、豊かで“いきいき”とした生活に向けたキーワードとして、「楽しいこと」「元気」「健康」「楽しむ」「活動的」「笑顔」「生きがい」などの言葉が頻出していた(図2)。逆に負のイメージを創造する言葉は見られなかった。

授業の最後には、Aさんから千昌夫さんの「星影のワルツ」の歌の贈り物があったが、ほとんどの学生がその歌手と楽曲を知らず反応が薄かったことから、Aさん自身も様々な世代が同じ時代を生きており、そこには生活上の共通点も相違点もあることを実感されていた。

なお、使用した写真は当事者および学生の許可を得て掲載している。また、学生のリアクションペーパー内容の分析と本稿への掲載については、口頭で説明および依頼し、同意を得て使用した。

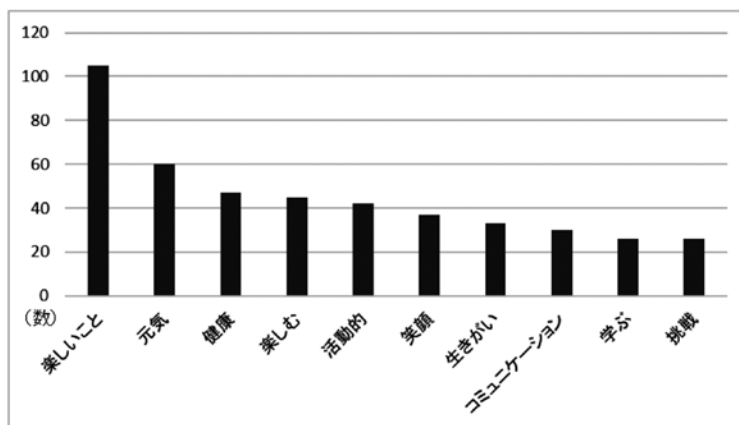


図2 学生が感じた、豊かで“いきいき”とした生活に向けたキーワード(上位10語句)

Ⅲ. 考察

1. 本授業の評価

本授業の目標は、「豊かな老年期に向けて」を柱に、地域で暮らす高齢者の生活の理解とし、教育方法をゲスト・スピーカーの語りとした。その結果、学生自身が現実社会での高齢者の生活を理解し、もてる力を活用した豊かで“いきいき”とした生活に向けた看護を考えることができた。

これまでの老年看護学の教育方法でも、看護のエキスパートによる授業や実技等を取り入れてきたが、そこには各人の確立した看護観を基盤に、学生はそれらの看護を当事者の思いと置き換えて学んでいく状況があった。そのこと自体の体験は非常に重要であるが、当事者の暮らしている世界や思いは、当事者以上に知る人はいない(野口, 2005)。したがって看護職者は「無知の姿」に立ち返り、当事者が思うことや大切にしている

価値に対して、耳と心を傾けて聴いていく必要がある。今回の A さんの語りは、まさにその原則を実感できた体験である。リアクションペーパーから抽出した「楽しいこと」「元気」「健康」「楽しむ」「活動的」「笑顔」「生きがい」などのポジティブなキーワードは、今後の老年看護学の実践の重要なキーワードとなったと推測する。

2. 今後の課題

A さんご自身の高いコミュニケーション能力の影響も否めないが、学生はポジティブな高齢者の生活をイメージしながら、加齢変化や老いを認めながらも豊かな老年期を生きるための看護の役割を考えながら授業を受けることができていた。これらのことから、本単元の教育目標は達成できたと考えられる。

しかし、加齢変化や慢性期疾患とともに医療や介護のサポートを受けながら生活する高齢者が多いことも事実である。本学では、学生は 2 年生から 3 年生にかけて、老年看護学概論 (1 単位) - 老年看護学援助論 (2 単位) - 老年看護学実習 I (2 単位) - 老年看護学演習 (1 単位) - 老年看護学実習 2 単位と計 8 単位の科目を履修し、学びを深め積み上げていく。その教育過程の中で、卒業時の到達目標を意識しながらも、高齢者看護の確かな知識の定着と対象理解が深まるように、柔軟で臨機応変な授業方法を模索・検討し、学生が高齢者に対してポジティブなイメージをもちながら看護実践できる力を育んでいきたい。

謝 辞

老年看護学概論の授業にご協力いただきました瑞穂市社会福祉協議会様、ゲスト・スピーカーとして貴重な経験を語っていただきました A さんに心より感謝申し上げます。

本研究に関して、開示すべき利益相反状態は存在しない。

文 献

石津仁奈子, 石川りみ子, 江口恭子 (2021). 老年看護学概論受講後の看護大学生の持つ高齢者イメージ, 秀明大学看護学部紀要 3 (1), 51-59. <https://www.bing.com> (2021-1-11)

野口美和子 (1996). 看護教育における老人看護学, 日本看護教育学会誌 6 (1), 1-9.

野口裕二 (2005). ナラティブの臨床社会学. 勁草書房, 東京.